心臓ということば

谷川恵一
人文学部国文学研究室

一

明治二〇年代はじめの小説をめぐる状況を、その細部にわたる絶妙なパロディによって痛烈に皮肉った斎藤緑雨の「小説評註」に、つぎのような一節がある。

室を隔て、母の声と覚しく連にきな子を呼立ればきな子はハイと起たんとするを呑雄は何思ひけん渠が袂をとらへたりきな子の心臓はこゝに於て太しく鼓動を感じたり（下略）

（註）母は意中人よりも難有し五倫の道を書分けたる著者の筆周密なり、心臓の鼓動を知りしは聴音器の力を仮りるなりと小説と窮理とはいよ〳〵離るべからず

（明二三・一・一七～二六『読売新聞』。ただし引用は『油地獄』（明二四・一一）による。）

緑雨が直接念頭に置いていたのは、作中人物の臓器である心臓の鼓動(1)を提示したつぎのような表現であるだろう。

甚タ心配シテ待チケルニ一人トシテ何等ノ答ヘナスモノナク加之ナラズ二人ガ心臓ノ鼓動未ダ止マザルヲ見ルニ足ルベキ咳嗽ダニ聞カザレハ再ビ之ヲ呼ブニ矢張リ以前ノ如ク寂然トシテ何ノ答ヘモアラズ（井上勤訳『月世界一周』第二回、明一六・七版権免許）

操は漸やくに虎口を脱して少しく心臓の動悸を鎮めしが（服部誠一『春告鳥』第五齣、明二〇・三）

其の娘子は是れ巴里第一の美人なりとて世評最とも高かりしが余は之れと朝夕顔を見合はしつゝ、数年間比隣に住ひ居たりしも為めに一度も余が心臓の鼓動を早めたるを感ぜしことなかりし然れども今此の少女に限りては余は実に覚えず知らず至大至強の感情に刺激せられたり（宮崎夢柳「義勇兵」第十九回、『東雲新聞』明二一・六・一九）

秘書官は予を伴ひて父の房に往きキリゝと房の戸を開きたるが此時予の心臓は俄に激しき鼓動を起して既に其場に倒れんとしたるを（福地源一郎・塚原靖訳『昆太利物語』中篇第四回、明二二・四）

予は書記官の職なれば末座に退きて会議の模様を筆記なす此時予が心臓は一段激しき鼓動を生じて我にもあらず筆持つ手の震はるゝ計りなるぞ怪しき（同下篇第九回、明二三・一一）

此時恰も月は山の端にさし上りて嬢の顔も白々と見ゆ小川の岸に腰打ち掛け休息するに嬢は猶眼を閉たる儘にして少しも開かず又身躰をも動さず、竊に胸の上に手を当て覗へば心臓の動気は激くして宛ら浪を打つが如し、（同第二十三回）

取る手は心臓の鼓動を伝へて劇しく脈を打たせて居る……途端に打出す時鐘、驚いてすりよる両性驚かされて飛立つ水鳥（美津晴子「はてな」『以良都女』第一八号、明二一・一二）

心臓暴かに鼓動劇しく悚然として戦慄ひしながら（須藤南翠『殺人犯』明二一・一二）

五分ばかり呼吸を休めて心臓の運動常に復するを待ち（海鶴仙史『大和撫子』第一回、明二三・二。初出は『みやこ新聞』明二一・一一・一六～二二・一・六）

心臓急遽に鼓動して霎時は止まざりけり（同第十四回）

此の言葉は玉枝子の心臓を急遽に鼓動ハしむる刺激物にして　ヱ、と叫びたるま、呼吸を断たんとせしがやう〳〵にして吾に回り（同第二十六回、明二三・二）

喜悦と畏怖と悔悟との三情は忽ち其の身を戦場として鋼を削り心臓の鼓動は遠き路を急奔したるが如く高まり（南翠『唐松操』第二十八回、明二二・六）

初心のやうなれど常にかはる男の音声。心臓のルブ＝ダブ早めの調子。（尾崎紅葉『風流京人形』第六、明二一・九）

人に知られぬ波をうつ私の心臓。（山田美妙「この子」第一、『都の花』第一〇号、明二二・三）

心臓の鼓動は其名の雪も恥かしき顔に証拠の茜色（宮崎三昧『女刺客』二十、明二二・五）

容色は今其の白きに過て聊か蒼みを含みたるが如し視る眼は沈みて唯だ絨氈の花に係りし塵の上に注ぐかと疑はれ心臓の鼓動のみ高くして血液は何に激されて何処に反応を呈したるやも知るべからず（南翠『隠君子』第二回、明二一・八）

其の身體を抱きて胸の方りを撫試むるに心臓には一種の鼓動を生じ居たり夫れにて知れり夫れにて多少の意ありしことを知れり其の意に向ひて探りを入れたることを知れり（同第二十回）

鳩尾の辺に手をさし入れて診ふに未だ全く絶息したるものにてもなく幽かながらも心臓の鼓動もあり惟ふに非常の悪熱に罹りて病苦の為め一時昏倒したるものなるべし（同『満春露』第二十回、明二三・二）

立んとするお秀の袖を引留たる其心中人若し近いて見るを得ば胸上の襯衣高低して心臓の鼓動甚じきを見るなる可し（石点頭『女人禁制きむすこ』第十三回、明二二・一〇）

余は其事の意外なるに驚き心臓忽ち鼓動を高めたり（矢野龍溪『浮城物語』第二回、明二三・四）

心臓という臓器をあらわすことばとして中世以降いっぱんに用いられていた「心の臓」に代わって、シンザウが、漢文訓読調以外の文体にもつかわれるようになり、次第に普通の用語（代表語形）となったのは、明治の中期（あるいはそれ以後）と推定されている（宮地敦子『心身語彙の史的研究』第一部第四章「漢語の定着――「こころ」「心の臓」「心臓」ほか――」）。しかも「「心臓」は蘭学の移入につれて、hartの訳語として多用され現代に至る」のだとすれば（佐藤亨「しんぞう（心臓）」『講座日本語の語彙』第一〇巻）、緑雨のほこ先は、もともと「窮理（科学）」に属し、いまだ新奇な響きをとどめている「心臓」ということばが、あつかましくも文学の世界にずかずかと入りこんできているという事態に向けられていたはずだ。

胸ニ適然リ惣身ノ血液俄ニ心臓ニ湊マル思ヲナセド此処肝腎ト燃へ立ツ心押鎮メ（川島忠之助『虚無党退治奇談』第二十八回、明一五・九、明治初期翻訳文学選）

猶モ気息ノ通フ様子ナルニゾ手ヲ胸ニ当テ、検スルニ微カナカラ慥ニ心臓ノ働クハ重手ノ負傷者ナル事明白ナレバ（同第二十七回）

「アントニヲ」が心臓に近き肉一斤を切取るは原告「サイロク」に於て法律上十分の権利を有するものとす（井上勤訳『人肉質入裁判』第三章、明一六・一〇）

ホ、ウそれが即ち神々が、此獅威差の臆病にも、彼妖兆に怕を抱きて、引籠らんかと思召され、言甲斐なしと譏し給ひ、我を耻め給はんとて、汝ジユリヤス獅威差は、心臓空しき獣なるかと告給へるに

疑ひなし（坪内逍遙『自由太刀余波鋭鋒』第二場、明一七・五）
折角の才智も宛も充分の資本を所持しながら大事に蔵の底に仕舞込んで置く経済知らずの資本家同然で心蔵の裡で学識才智がウン〳〵呻つて居る斗り（桜峰居士『青年之進路』第四回、明二一・五）
ルーソーは既に艱難苦楚の中に起居するも之れが為めに未だ以つて其の心臓を短縮し又た伸張するに足らす（夢柳「垂天初影」第十回（下）、『土陽新聞』明二〇・一・一七）
今や夫人は現世の苦患を全く打ち忘れて愉快なる天堂の夢魂をや結ぶらん一たび激しく雙瞼に潮し来りし血液も其の心臓に還り収まり顔色は自づから白きに過るが如くなるも（同『自由乃凱歌』第三十四回、明二一・一〇）
皇后は愉快極まり殆ど其の心臓の下底まで震動せり（同第二篇、第五回、明二二・五）
此の一言を聞くや否や査寧夫人安徳麗は毒蛇に心臓を噛まれし如く殆んど其の身を飛び上り（同第三十一回）
此の一言は寧査伯の心臓に衝触したり（同第三十二回）
伯が坐に在らざるや其の可憐なる心臓は懸念を以て充実され巴々焉たる眼光は頻りに四周を遍歴せり（同第五十一回）
嗚呼諸君よ我が仏蘭西人民たるもの夫の普漏士王軍総督府の布令を見て誰れか其の暴慢無礼を憤激せざらん今や殆んど一世紀を経過したるも余は此の暴慢無礼極まる布令の事を回憶する毎に心臓の尚ほ憤激を以つて膨張するを覚ゆるなり（「義勇兵」第三十九回、『東雲新聞』明二一・七・一二）
斯る外形感じなきが如き皮膚の下にも人間の心臓ありや（井上勤訳『通俗八十日間世界一周』第十一回、明二一・一〇）
予は此の美人を見るが儘に今まで胸に遣る方もなく蟠りつる苦悩の堆塊はいつしか消え却て頬に熱を覚えて只管心臓の作用のみ激しくなれり（『昆太利物語』上篇第二回、明二一・一一）
其とは知らず何気も無き夫人の話を聞や否外見には如何か知らず予の心には予の顔色は忽ち青ざめて眼も眩み心臓には洪鐘を撞く如き響を生じて手足は冷水を浴たる如くワナ〳〵と戦慄る様に感えたり（同下篇第十九回）
胸を見透したように……思ふことを不意にいひかけられ心臓はドキッ。ボウと熱く血液の面部へ充る感覚。（『京人形』第七）
秀子は何故にか白く艶かに化粧し顔に紅き色彩を映じ来れり吊したる紅燈の影の映ぜしかと思へば然はなくして瞼の辺いや赤らみたり、秀子は「千代見さん見たでせう」と言ひつる鞠子の一言が吾に向つて問ひを設けたるものならんと誤解したるより心臓の働らきに一る機関を添へたるものなりし（『隠君子』第十回）
鞠子はキッと容を改めたり其の容を改むると同時に身に添たる自造的妖怪変化は倏焉として跡を潜め元の古巣の心臓に消え戻れり（同第十二回）
秀子は語尾の唯だ一語に殊の外気色を損したり心臓を衝く血の迸しりて顔に端なく紅を染出せり（同第十三回）
肺部も心臓も更に虚弱なる所なく（南翠「朧月夜」第十二回、『新小説』第六巻、明二二・三）
少く心臓に刺激を与へられた気味にて赤らめた頬へ莞爾と渦の湧く（『女刺客』二十）
私に寝ろとは、責められた頭の中を詐や人殺の考へが駆け廻ツて居て、なんでまア寝られましやう、睡は天から賜はる平和な息でしやう、睡られるのは鏡の様に清い心臓計ですよ（鷗外漁史・三木竹二同訳「伝奇トーニー」其二、『読売新聞』明二二・一一・二五～一二・三）
どうぞ慈悲の心が勇ましく入込ことが出来る様、心臓の戸を開けて

下され（同其三）

人間一生の悲哀は此時に覚えて、我と我が毛をむしり、唇も噛さかれ、心臓は破る丶程に歎きしが（川上眉山『墨染桜』二の上、明二三・六）

お栄は俯伏したま丶、頭をもあけず震へ声に／「わ……わたくしは神や仏にも見……見捨てられました、」／破裂するやうな心臓からちぎれちぎれの泣声（忍月「黄金村」第十七回、『聚芳十種』第八巻、明二五・一）

「心臓」ということばが完全に定着しきった現代の読者は、緑雨がこうした表現にたいして感じたであろう違和感を追体験する能力に欠けている。なるほど緑雨にならってこれらの表現を奇妙なものときめつけるふりをすることはたやすい。だが、時代を少しずらして、たとえばつぎのような表現を前にしたとき、われわれはそれをまったく自然なものとして見過ごしていた自分に気づくほかないのである。

ぼんやりして、少時、赤ん坊の頭程もある大きな花の色を見詰めてゐた彼は、急に思ひ出した様に、寐ながら胸の上に手を当てゝ、又心臓の鼓動を検し始めた。寐ながら胸の脈を聴いて見るのは彼の近来の癖になつてゐる。動悸は相変らず落ち付いて確に打つてゐた。彼は胸に手を当てた儘、此鼓動の下に、温かい紅の血潮の緩く流れる様を想像して見た。是が命であると考へた。（漱石『それから』一、明四二。漱石文学全集第五巻による。）

「心臓」という不細工なことばが文学のなかに存在することにわれわれはかくも寛容になった。それはたんに、

心臓ハ胸ノ内ニ位シ両肺ノ間ニアリ大人ニ於テハ其大サ手ノ拳ノ如ク全ク肉ノ質ヨリ成レリ心臓ノ内ニハ縦ニ肉アリテ左右ヲ分チ且ツ左右共ニ各〻其内ニ二ノ房アリ故ニ心臓ハ都合四ノ房ヲ為セルモノニテ左右共ニ上ノ房ヲ上房ト云ヒ又左右共ニ下ノ房ヲ下房ト云フ

（中略）

心臓ノ上房ト下房トハ固ヨリ肉ノ質ニシテ此肉糸ニ於テモ亦他ノ肉糸ニ於ケルガ如ク伸縮ノ働ヲ為スモノナリ但シ上房並ニ下房ハ左右トモ同時ニ縮ミ同時ニ張ルモノナレドモ上房ノ縮ムトキニ下房ハ張リ下房ノ縮ムトキニ上房ハ張ルナリ斯ノ如ク交番縮張シテ心臓ノ血ヲ出納スルモノトス

（松山棟菴・森下岩楠合訳『初学人身窮理』巻之上第五章「循環ノ道具ノ事」、明九・六再刻）

なだといったくだくだしい生理学の初歩がことさらな参照を必要としない程度に常識になってしまった(2)からでも、あるいは、「心臓」ということばが定着してしまった(3)からでもない。文学の表現にたいする構えそのものが変化したのである。主として十九世紀フランス文学についてヴェロンが判定を下していたように、それはあんがい文学と科学との蜜月から生まれた事態であるのかもしれない。

夫レ詩学ノ諸学科ト相助ケ、美学上ノ感情ト理論ノ条理ト相須チ、以テ用ヲ為スコトハ、正ニ近世詩風ノ性乃チ然リ、蓋シ物理化学其他百般ノ学術益〻其奥ヲ極ムルハ、第十九世紀ノ今日ヲ最モ盛ナリト為ス、此ヨリ前未ダ曾テ有ラザル所ナリ、顧フニ此等学術愈〻進闡スルトキハ、詩学ノ此レト用ヲ相為スコトモ亦愈〻近密ニシテ、竟ニ相離ル可ラザルニ至ルコト想フ可キナリ、世ノ僻説ヲ唱フル者、美学ニ於テ動モスレバ専ラ古昔希臘羅甸ノ諸芸ヲ讃称シテ已マズ、以テ近代ノ諸芸ヲ絀ケント欲ス、其言ニ曰ク、希臘ノ芸人皆神代記ノ典故ヲ以テ題目ト為ス、此レ其諸作ノ雅趣有ル所以ナリ、今ヤ諸学科ノ論ヲ引テ之ヲ詩中ニ入ル、条理愈〻密ニシテ雅致ハ則チ地ヲ掃フテ尽クト、吁何ゾ其レ繆レルヤ、希臘人ハ其神代記ノ典故ニ感ジテ作ル所有リテ、其感情洵ニ深厚ニシテ、能ク人ヲシテ亦之ヲ感ゼシム、近代ノ作者ハ諸学術ノ道理ニ感ジテ作ル所有リテ、其感情

モ亦深厚ニシテ、能ク人ヲシテ之ヲ感ゼシム、何ノ相劣ルコトカ之レ有ラン（『維氏美学』下冊第二部第七篇「詩学」第五章「近世詩風ノ性質」、明一七・三。『中江兆民全集』3による。）

文学と諸科学とが結びつき、「諸学術ノ道理ニ感ジテ作」られた作品が「未ダ曾テ有ラザル」「感情」を創出する――ヴェロンの素朴な見取り図に魅せられたかのように、ともかく、明治二〇年前後のわがくにの作者たちは、諸科学のうちでもとりわけ生理学に執心していたとおぼしく、作中人物の身体の内部を描いてみたいという屈託のない欲望を押さえることができなかった。「心臓」以外にも、たとえばつぎのような行儀の悪い表現を拾いだすことができる。

ちかごろまたブレイン〔脳髄〕が不健くて（逍遙『当世書生気質』第三回、明一八・七。明治文学全集16）

これか私のブレインに浅からぬ注意を与へました（広津柳浪『花の命』明二二・一一）

貴女の真情は既に私しの脳髄に附着して居りますのサ（南翠『雨牕漫筆緑蓑談』第十三回、明一九・一〇）

先哲の言論が余の脳漿を振蕩せしめ（嵯峨の屋おむろ『無味気』明二一・四）

其姿眼に入るや否脳に伝はり終に心の裁判を煩す（忍月『捨小舟』第十回、明二一・三）

残念！　けふは乱緒の脳に渦かれて一句も出ない（同『露子姫』第二回、明二二・一一）

小心な男とて不名誉の三字に脳は乱雑（『京人形』第九）

神経の感動が激しく脳を責めました。（石橋思案『乙女心』第二回、明二二・六）

活潑にはたらくだけ鋭敏な神経、絶えず脳に走馬燈をまはして是からの運命の影法師をあらはせば（美妙「空行く月」第十一回、『以良都女』第一九号、明二二・一）

再度の刺激大脳の働作を停めました（漁山人「猿虎蛇」第五、『文庫』第二五号、明二二・八）

余は是を聞くや我肺府より血液の躍然として脳漿に上りて忽ち沸騰するを感じたり（『無味気』）

耳の期望は其甲斐があって、鼓膜を貫く程鋭き声が、突然起りました……ハテ……しかも人の脳を劈く程の悲哀の意味を含みました、高ひ声が。（柳浪「慎鸞交」第二回、『日本之女学』第一六号、明二一・一二）

其一言小川の脳中を縫通し眼は瞑眩し血管は掩塞し心経は萎枯し臓腑は乾涸し暫時は無言なりし（中井錦城「志願兵」第六回、『新小説』第五巻、明二二・三）

風なきに濤たつ心臓の響き、火気なきに沸騰する満身の血管、鬧がはしく駈廻る小動脈、弾くが如く跳り狂ふ大動脈、（「朧月夜」第九回、同）

「お姉様にほ……ほれてゐらッしやるッて……／思ひ切ッて放した妹の征矢は無慙にも姉の胸板を見事打貫きました。／血汐は脈管を一斉に駈け上ッて顔に集りました。（思案「花盗人」第六、『文庫』第二〇号、明二二・五）

聴衆一同咳もせず、動脈ばかり盛に搏たせて、聞て居る（美妙「風琴調一節」第一曲、『以良都女』第一号、明二〇・七）

共に白髪と思いてし、君に配ふ可きその人と、顔見合せては仲々に、五臓六腑も上を下、血液さえも循環を止め、色蒼然て唇の色もいつしか失せはて、殆く昏倒る計りなり（小林雄七郎『自由鏡』二篇第二十二齣、明二二・九）

胸の骨に刻まれたる恋人の肖像の消ゆべき時もなし。何時の握手の折よりか、動脈の血の中に、なつかしき移り香去らず（幸田露伴『露

団々』第十一回、明二三・一二）
露の滴りさうなる滑こき頬には気血よく循環して一皮裏に紅ゐの潮見事に潮し、（塚原渋柿園『政治小説条約改正』第五回、明二二・一一）
一眼球子に映ずる事物の一種不思議の感触を与へざることあらざれば（『緑蓑談』第十六回）
幼少から化物の話しを聞て居るのが脳髄に止つて居る処へ怖いと思ふ精神が手伝つて知覚神経と視神経に変則の感動を与へるのだ唯物論者にでも聞かしたら直に化物の解剖を始めるといはうぜ（南翠『一顰一笑新粧之佳人』第九回、明二〇・五）
うたゝ寝の常として半眠半醒の間に徨彷し、脳の運動一半は明界、一半は幽界確実なるが如く、朦朧なるが如く、時々細やかなる眼より微かなる光線の漏るゝを見るは、猶ほ幾分の知覚神経活動するを証するに足る、（忍月『お八重』第七回、明二二・四）
睛より出る光線に空気震動して知覚神経是が為に麻痺するこそ不思議なれ（露伴「刹那生死」、『文庫』第二七号、明二二・一〇）
妙な事はフツと神経に感じたのサ（『緑蓑談』第二十回）
机に向へばたゞ〳〵神経の作用のみはげしくなりて。増々思ひ乱る、妄想を遣るに所なし（田辺花圃『藪の鶯』第七回、明二二・六）
視官の感触速かなれば満腔の思想一洗して今や掌裏に宝玉を握りたる思ひやすべき将聴官の迅速なる為め破鏡を擲つの感はあらずや（『緑蓑談』第八回）
視神経は申すも更也魂いつの間にかピヨイと飛んで件の美婦人に纏みつきしかば（嵯峨の屋『美人の面影』発端、明二二・三）
木犀の香は窃と鼻の障子を開けて嗅神経に捕へられ、（美妙「ふくさづゝみ」、『以良都女』第四号、明二〇・一〇）
ネといふだけが外へ漏れて跡の詞はお秀の聴神経に響くばかり（饗庭篁村「聟撰み」第十回、『むら竹』第三巻、明二二・八）
敏子の鼓膜が聴神経に伝へし隣室の人語の、其荒増は聞き得たれど（柳浪『女子参政蜃中楼』第九回、明二二・一〇、明治文学全集19）
其響の皷膜に通じて脳髄へ徹りし（露の屋主人「大川物語」第十八回、明二二・六）
笑ふ声の呵々として我が皷膜を動かしたり（『新粧之佳人』第九回）
涙腺は無理に門を開けさせられて熱い水の堰をかよはせた。（美妙「武蔵野」中、『夏木立』、明二二・八）
口がむづむづして唾腺はすでに津々と催します。（「この子」第二十二）
其声は渾べて鈍い調子で無く、音楽で言へばバス、クレフ（Bas Cle）生理で言へば声帯の隙間が細い質であつた。（「風琴調一節」第二曲『以良都女』第二号、明二〇・八）
礫は滞ほりなく水本の背後に命中したりしかば水本は大きに驚き石の脊髄に痛みを伝へたる時（『新粧之佳人』第十六回）
光一はホト〳〵感じ入た、嬉しさは脊髄までしみ渡て、筋肉も震へるまでに覚へた。（巌谷漣『初紅葉』第十一、明二二・四）
若しお千代をして爰に二年の春秋を積み生殖器の発育せる処女ならしめなば心を悩すべき想像を描き初むる第一楷級とはなりしならん（『唐松操』第八）
白独鈷入りの茶博多の狭き帯を骨盤に二巻まいて（『京人形』第七）
かつて仮名垣魯文の『高橋阿伝夜刃譚』（明一二）においておそらくはじめてこころみられた手法、すなわち、悪の遍歴をかさねた主人公の最期に「細密に解剖検査されしに膈漿幷びに脂骨多く情欲深きも知られしとぞ」という一節（引用は『新編明治毒婦伝』（明二〇・一一再版）による）を忘れずにつけくわえたセンセーショナリズムに起源をもつこうした事態は、十年足らずのうちに魯文が想像もしなかった進展をとげ、

作中人物たちが作者の無作法な「解剖」の手からのがれることはきわめてむつかしくなっていた。

欧米ノ小説ハ之ニ反シ専ラ美術的ヲ主トシ人情ヲ説クモ傍ラ地理天文生理理化学等ヲ事ニ託シテ之ヲ説ク故ニ其教育ニ与リテ大ニ功アル所以也日本小説ノ害ヲ変シテ利トナス只欧米ノ小説ニ傚（ならフ）（傍フ新案ヲ交ルニアルノミ（飯塚弥太郎「小説ノ利害」『穎才新誌』第五二九号、明二〇・八）

といった要求は、まずはじゅうぶんに満たされたかにみえ、逆に、

小説と科学例へば社会学若くは心理学の如きものとは其材料は均しく是社会なり人性なりと雖とも資て之を使用する目的に至ては二者全く相反し小説には科学の外別に小説固有の範囲ありて其中一歩も科学の闖入を許さゞるべし（「科学の文学に及ぼせる勢力」『哲学会雑誌』第三二号、明二二・一〇）

といった、科学にたいする文学の自律の叫びも、守勢にまわったものの弱音じみてきこえるほかなかった。当時、いまだ文学は科学にたいしてみっともないほどに従順であったし、そして、そうであることにおいてみずからを新しく創りだそうとしていた。たんに知識としての科学が読者の目さきをかえるために動員されただけでも、作品世界のリアリティの保証が科学に要請されただけでもなく、科学に侵されることで文学そのものが深いところで変わろうとしていたのである。

そうした事態に棹さした作者のひとりは、みずからの採用した戦略についてつぎのように誇らしげに語っている。

さても小説家ほど六かしきものはなし目に見ぬ物、耳に聴かぬ声、鼻に嗅かぬ匂ひ、口に味はさぬ味ひを視るがごと、聴くがごと、嗅くがごと、味はふがごとくよりも今猶ほ微妙に書顕はして人の感情に訴へずてはならず美術の真に入らんとするには五官のはたらきに知らざる感情といふ無形の強者（つわもの）を虜にして解剖せずしてはなるまじ

技芸士（アーチスト）などいへる其の道の博士ならざらんには容易く美術の真域に入るを得べけんやこれを思へば世の中に小説の改良家とならんは避くべき業になん（南翠『新粧之佳人』自序）

「小説の改良家」を自任するかれの狙いは、作中人物たちの「五官のはたらき」や「感情」を読者にさながら感じせしめること、さらには、読者をしてそうあらしめるために、自己の作品を通して読者の文学表現にたいする感受性を訓育していくことにあった。「心中を解剖して臓腑を洗ツて見」る（可愛楼晴雪「人心の解剖」其二、『読売新聞』明一八・一〇・六）、すなわち、読者の前で作中人物たちの身体を生きたままで解剖してみせることが、さしあたっての手段として選ばれていた。

エメルソン曰く「人はたゞ人を画き、人を作り、人を思ふ」と実に然り。而して彼の小説家なるものは、殊に其の甚敷ものなり。彼れ人の顔色を見る、恰も博物学士の精細冷淡なる眼孔を以てし、彼れ人情を察する、恰も解剖学士の周到寧静なる観察を以てす。其の穿ち得て、人を驚かし、人を喜はする決して怪むに足らす。（徳富蘇峰「近来流行の政治小説を評す」、『国民之友』第六号、明二〇・七）

肉眼では見ることのできない身体の内部をのぞくことと、「五官のはたらきに知らざる感情」を了解することのあいだには、ある実体的な関連がある。

心腹を洞観すべき顕微鏡（『緑蓑談』第九回）

他目（よそめ）には無心に見ゆれども肉を剖き心肝を出して之を写真せんには森羅万象限りなき妄想（まうざう）中の多数を制すは情慾といふ物なるべし（同第十一回）

卿の精神を解剖するに苦しんで居るのです（『新粧之佳人』第十九回）

恋の初期は只「あひたい〳〵」と思ふばかりだと云ふ事を、心臓（しんぞう）の解剖から会得しました（思案外史「妹背貝」其二、『文庫』二六号、明二二・九）

スコツトは実に英雄豪傑を写すことが上手です中々何うして甘いものだ併し女を写す事はまたリツトンに遠く及ばない今読で居る「マルトラパース」なぞは実に不思議です丁度顕微鏡で脳髄の作用を見るやうなものだ何うして此のLoVeといふ事が鳥渡分かるやうで一番分らない問題ですテ（南翠『雛黄鸝』第十六回、明二一・一）

若い男女の無遠慮なる話し程解のなきものぞなき此れでも心の裡を見る顕微鏡のあるならば如何なる機械の運転にて箇様な詞の反響を生ずるやを探究し得らるべし道人は幸ひにして此の貴重なる顕微鏡を所持致せば今道人の見得る限りを写し出してお目に掛んか余り見苦しく尾籠なる事のみなれば依然人々の推測にお任せ申した方が便利にして且つ高尚なるべしと思考仕つるなり（南翠外史删潤・彩幻道人戯著『社会現象うつし絵』第四番、明二一・五）

今試みに玉枝子の脳髄を解剖せんに玉枝子の脳髄は愛慕と想像の分子より成たり（『大和撫子』第二十二回）

石部氏は此美人を見て果して如何やうに感じたるや放蕩遊治ものは此レデイに出逢ひて不知何等の感情をば生ぜし書生職人官員学者さては新聞記者商人学者其外小児でも婦人達でも又は乞食までが所感はあるべしそれを一々に解剖して記さば或は春永の眠気ざまし多少のお慰にならうかもしれぬされば次号よりは手当次第におのれの拙筆の及ぶ限り件のおひいさまを見たる折の諸人の感情を写して見るべし（『美人の面影』発端）

「顕微鏡で脳髄の作用を見」ればそこには「LoVe」が見え、「心臓」をのぞくとうごめく「情慾」が発見されるのであり、つまり、「解剖」することは「感情を写」すことと同義であった。

したがって、身体の内部を表現しようとする情熱をかきたてていたのは、諸科学のうち、生理学というよりむしろ生理学のうえに立った心理学のほうである。作中人物の感情や感覚が身体現象としてひとまず客体化されているわけだ。

実に傑作です余しは近来彼な小説（逍遙の「細君」――引用者）は見ません殊に心理を説くうちに見識と発明とがあツてベインの心理書を顧問にして書た比では有りません（南翠『万春楽』上巻第七回、明二三・七）

と作中人物に語らせてもい、

彼の浅沼精一郎は、自ら信じて自ら説たる、心身連関の原則に依り、今は其身に失望の、敢果なき色を著はしけり。（南翠「心中」第三『当世俳優修業・慈善・心中』明二三・八）

ともあることから、そうしたことは窺えるはずである。すなわち、「それ稗官者流は心理学者のごとし宜しく心理学の道理に基づき其人物をば仮作るべきなり」（『小説神髄』）との周知の宣言は、たんに、

所謂アツソシエイシヨン（連感）といふ心の作用で。（『書生気質』第八回）

母の事が胸に浮かめば、思想の連絡、父の事も跡から直に浮かんで来て（美妙「骨ハ独逸肉ハ美妙花の茨、茨の花」『夏木立』）

思ふまい〳〵と思ふ傍から直に矢ツぱり思ひ出す、なぜなれば、思ふまいと思へば「何を」と云ふ問いが出て来る、其「何を」の問いに対して、兄、波之助、お米、お咲と云ふ連感が胸に浮んでくる。（『お八重』第十一回）

どうして世間にかうも似た者があるだらうか？……と考へますとアラ不思儀……妙に此女がこひしく慕はしくなツて来ます。偖も不思儀なは心理学で云ふ思想の連絡でせう？（『乙女心』第二回）

など、心的内容の連合心理学的説明として結実しただけではなく、「心理学者も唱へます通り人の心と體とは密接の関係で御座ります」（松屋主人「西洋家の御医者様に申す」『読売新聞』明二〇・四・八）といわれるように、ベインらを中心に当時移入された心理学がおおむね心理生

理説の考えかたに立つものであったことから、さきに列挙したように、表現のうちに作中人物の身体を性懲りもなく露出させることになったのだと考えられる(4)。「生理心学者は霊を解剖せんとせり、惣ての理学者は惣ての無形物を有形にせんとせり」(「万目漠々、日本社会の一大弊源。」『女学雑誌』第一五八号社説、明二二・四)。

二

その著『精神と道徳の科学』第一部(Mental and Moral Science, pt. I, 1868; 3rd. ed., 1872.)の冒頭、「心意ノ定義及ビ区別」を扱った箇所で、精神と身体の関係についてつぎのようにベインはのべていた。

(五)主観ト客観(心意ト物質)トハ、最モ大ニ反対スル経験ナレドモ、心意ト有形機関(a definite Material organism ―― 原著第三版、以下同じ)トハ、自然ニ相関繋スルナリ。

(中略)凡ソ各自ノ心意ハ只自身ニテ直接ニ之ヲ知ルヲ得ベシ。然レドモ他人ノ心意ニ至リテハ、唯有形ノ機関ニ由リテ、之ヲ知ルヲ得ルナリ。

心意ノ作用ニ関係スル有形機関ハ、第一脳及神経、第二動作ノ機関即チ筋、第三覚官ノ機関、第四栄養管、肺臓、心臓等ヲ含有スル臓腑是レナリ。而シテ就中関繋ノ最大親密ナルハ、脳及神経ナリトス。

(松島剛ら訳『心理全書』巻一、緒論第一章、明一九・四。ただし飜訳原本は一八八四年版。)

精神と身体との二元的対立を前提としつつも、両者を神経細胞レベルにおいて、知力までをふくめ全面的にむすびつけようとするのがかれの心理学である。『心理全書』では右にあげた規定をうけてさらに「神経系、及其官能(functions)」について簡潔な説明がなされ、本論第一編「動作、覚官(SENSE)、及本性(INSTINCT)」における、

感覚(SENSATION)ノ定義ヲ下シテ、身躰ノ局部ニ外物ノ作用スルヨリ生ズル心意上ノ印象、或ハ感応(feeling)、又ハ意識ノ状態ナリトス

といった叙述へと進んでいく。

「感覚」は「身躰ノ機関ニ随テ」「五官」と「有機感覚(Organic Sensations)」とに分類される。「有機感覚」とは「体内ノ諸機関及ビ其組織中ニ存在スル感覚」を指し(麻生繁雄編『倍因氏心理新説釈義』明一六・七)、さらに「筋ノ有機感応」・「神経ノ有機感覚」・「循環及栄養ノ有機感応」・「呼吸ノ感応」・「寒熱ノ感応」・「栄養管ノ感覚」とに下位分類されていた。

こうして身体から心への通路を開けたベインは、反対に心から身体へと引き返すみちのりをつぎのように説明する。

心意ト身體トノ合一ナルコトハ、殊ニ感応ノ表現スル所ニ於テ之ヲ見ルナリ。

感応ハ、多ク身體上ニ伴生ノ変化ヲ現ハスコトハ、古ヨリ世人ノ最モ熟知スル所ナリ。喜悦、悲痛、畏怖、憤怒、傲慢ノ如キハ、各々身體上ニ其特象ヲ表ハス、是レ古今何ノ世代ニ於テモ、東西何ノ国民ニ在リテモ、同様ナリトス、故ニ或ハ之ヲ自然ノ言語(natural language)ト称スル者アリ。以テ心意ト身體トハ初メヨリ一定ノ関繋アルヲ知ルベシ。

(『心理全書』巻一第一編第四章「本性」、「初メテ起ル感応ノ表現」の項)

「自然ノ言語」として挙がっているのは「顔面及容姿」・「音声ト呼吸筋」・「全身ノ筋」・「機関」の四種であり、このうち「機関」はさらに「涙腺及涙嚢」・「生殖機」・「消化機」・「皮膚」・「心臓」・「乳腺」に分けられる。

心臓。心臓ノ作用ハ、心意ノ状態ニ依リテ変更スルコト、猶ホ身體ノ健康ニ依リテ変更スルガゴトシ。或ハ感応ニ由リテ、心臓作用

ヲ刺撃シ、以テ其勢力ヲ増加スルコトアリ、或ハ苦痛、恐愕、及欝悶ノ為メニ幾分カ其作用ヲ衰微セシムルコトアリ。（同）

もっとも、急いでつけくわえるなら、このときベインはかならずしも「苦痛」という「心意」が原因となって「心臓ノ作用」の「衰微」という結果がもたらされる、といった退屈な二元論を繰り返していたわけではない。

（心身の関係は）直接ニ心神ヨリ肉体ニ、肉体ヨリ心神ニ及ホスカ如ク単純ナル者ニアラス、心身二方ノ現象ニ因リテ心身二方ノ現象ヲ生シ、終始連合契盟スルコト曾テ相渝エス（森本確也・谷本富訳注『心身相関之理』〔Mind and Body. The Theories of Their Relation, 1883.〕第六章「心身ノ結際如何」、明二〇・一二）

つまり、「心身両者ハ宛モ分ツヘカラサル雙孖ノ如」く、「凡ソ心神的事実ハ同時ニ身体的事実ナリ」（同）とするベインの心理学においては、「苦痛」と「心臓ノ作用」の「衰微」とは、元来「一物ニシテ形体的、心神的ノ二性二面ヲ幷有スル者」（同第六章「精神ニ係ル学説ノ沿革」）ととらえられるのである。ベインの心理学の面目は、西洋中世哲学以来の心身二元論と近代科学の唯物論との折り合いをつけようとした「折衷唯物論」にあった（同、訳者序言）。

「ベインの心理書を顧問」（南翠）にするとは、こうした心身関係についての説明を受け入れ、それに依拠するということである。南翠の発言が具体的にどの作品を指したものであるかは不明だが、特定する必要もあるまい(5)。ベインはすでに揶揄のひきあいに出されるほどに有名であった。

すでに人間に自尊の情があるからは嫉妬の心もかならず有るのは分解り切ツた処の事実で何もベインやサレーの門に干魚を捧げるにも及びません（美妙「さすがに双紙」第一篇、『女学雑誌』第一一六号、明二一・六）

今の小説家はみんな聴取傍問（きりとりぼうもん）でべいんの修辞書を一冊読むと忽ち文学者になつた心持で詩人と小説家の名を覚えて無暗にみるとん、すこつとなんぞと云ふは馬鹿な話だ。鈴の屋も其党派で何でも彼でもさかれいだのぢツけんすだのと云ふが、どうでせうあの男の小説は。視神経が右に注いだとか、眼をぱち〳〵するとか、それより外に能なしだからね（藤菴主人〔内田魯庵〕「当世文学通」『都の花』第四巻第一七号、明二二・六）

ベイン先生ハ近時該学派中ノ錚々タル者ナリ、夙ニ科学的研究法ヲ応用シテ以テ心神ノ顕象ヲ分析解説シ、之ヲ論スルコト整然秩序アルヲ期ス、遂ニ溢レテ「智覚及智力」「情動及意志」ノ二大書トナリ、始メテ心理科学ノ面目ヲ一変セリ、ミル氏之ヲ賛シテ其功先哲ヲ凌駕シ、等倫ヲ超絶ストナス、誠ニ遇称ニアラス、憾ムラクハ二書共ニ巻帙浩瀚初学ニ便ナラス、即チ節約シテ心理学一巻トナシ（『精神と道徳の科学』第一部のこと――引用者）、伝ヘテ我国ニ汎行シ、大学ヨリシテ中学校、師範学校、私立諸学校ニ至ルマテ皆択ンテ教科書トナセリ、其書心神諸能力ヲ論スル毎ニ必ス之ヲ身体心神両側ノ発顕ニ徴証シテ、巨細漏ラサ、ルハ人ノ能ク熟知スル所ナリ（『心身相関之理』訳者序言）

しかも、ベイン以外からも、同様に二元論に色目をつかいながら合一を説くたぐいの心身論を聴くことが可能であった。

心と物質とはまったく正反対の関係にあることを肝に銘じておかなくてはならないけれども、同時に両者の密接な関係も考えにいれておく必要がある。人間は身体組織と心とから成っている。人格や「自我」は、物質の枠組みと結び付いているか、さもなくば、そのなかに血肉化されているものである。心的プロセスとか心の働きとかは、すべて神経組織の活動と結び付けられる。最も抽象的な思考に際してさえ、脳の中枢におけるなんらかの活動を伴うものである。した

がって、精神と物質、霊的なものと肉体に属するものとをごっちゃにしないように気を付けながら、まるでそれらが同じ種類のもの〔of the same kind〕（同質のもの〔homogeneous〕）であるかのようにみなさねばならない。心を取り扱うに際しては肉体を排除することができないのである。心について考えようとするときには、つねに、生きている機関、なかんずく神経組織の活動にともなうものとして、そして、なんらかの説明しがたい経路によってそれに関係づけられたものとして考察されねばならない。（James Sully, Outlines of Psychology, chap. I, 1884.）

人ハ心神ト肉身トノ合成物ニシテ肉身アリ以テ外ニ接シ心神アリ以テ内ヲ理ス故ニ五官物ニ触レテ而シテ感情生シ感情生シテ而シテ身體之ニ随フ是レ即チ造化ノ妙処ニシテ人以テ其人タルノ事物ヲ経営シ其人タルノ歓楽ヲ享有スル所以ナリ蓋心身全ク相合シテ而シテ後初テ人在ルヘシ未タ曾テ心身相離レテ其作用ヲ能クスルモノアラサルナリ（国府寺新作「心身関係論」『学芸志林』第四巻、明一二・五）

神経ノ周囲ニ刺激ヲ与フルトキハ神経ハ之ヲ伝ヘテ中心ニ達シ精神中ニ感覚ヲ惹キ起スモノナリ、之ト同シク精神中ニ感覚アルトキハ必ズ動神経ヲ伝フテ筋肉ノ収縮ヲ惹キ起シ其ノ感動ヲ外面ニ表出スルナリ

（中略）

忿怒、喜悦、耻辱等ハ種々其ノ顔色異ナリト雖モ凡テ血ノ循環ヲ速ヤメ顔色ヲ赤クスルコトニ於テハ孰レモ皆相似タルガ如シ、之ニ反シテ失望、悲哀、驚愕等ノトキニ於テハ血ノ循環ヲ遅クシ顔色ヲ青白ニ為スモノナリ、是等ノ働キハ動神経ト筋肉ノ関係ニ非ズ、動神経ト動脈ノ関係ニ由リテ発スルモノナリ

（元良勇次郎『心理学』第二十一章「表出」、明二三・一二）

おおくの作者たちに作中人物の無遠慮な生体解剖を試みさせる一方で、そうした表現をけっしてむきだしの生理学にとどまらないある水準の表現――作中人物の感覚や心理の表出としても読みとらせるように読者をしむけるという、かつて存在しなかった場を成立させたのは、ベインを代表とする心身関係の心理学である。作者のうちのある者がベインの心理学によって教育されたり、また他の者がベインを読む濃密な時間をもったといった事実からそうしたことがくまなく立証されるというのではなく、生後いくばくもないある種の表現に認めることのできる母斑のようなものとして、それは表現じたいのうちに刻まれてあるのだ。かりにこうした事態について知らされたとするなら、自著の邦訳である『社会平権論』が民権運動の理論的支柱となったことに驚愕してみせたであろうスペンサーのように、修辞学の教科書を書くほど穏当な趣味の持ち主であったベインもまた、おそらくみずからの心理学がはるか極東の地においてとんでもないやり方で応用されているのを嘆いてみせたかもしれぬが、かれにもまんざら責任がないわけではなかった。みずからの心理学がいかに芸術に有効であるかということをかれは語ってしまっていたのであるから。

蓋シ吾人カ他人ノ内心及ヒ性質如何ヲ推量スルコトヲ得ル所以ハ畢竟右ニ述ヘタル如キ心神上ノ感覚ト身体上ノ表現ノ間ニ一定不変ノ連繋アルヲ以テナリ、看ヨ、喜怒、愛憎及ヒ怨恨、苦痛ノ情ヲ抱クトキハ其人故意ニ隠匿スルニアラサルヨリハ能ク其状貌ヲ望ンテ以テ其心情如何ヲ洞見スルヲ得ルノミナラス時トシテハ其感覚ノ強弱ヲモ推量スルヲ得ヘシ

（中略）

夫レ然リ、人木石ニ非ス、人類各般ノ作行ニ於ケル種々ノ情貌ヲ推シテ各々其内心ノ表証トシ之ヲ見ルトキハ大ニ人ヲシテ感動セシムルニ足ルモノアルヨリ、文明国ノ美術ハ夙ニ此理ヲ利用シ、画工、彫刻家及ヒ詩人ハ皆人ノ感覚ヲ表スルニ各々一定ノ反応ヲ以テセ

リ、蓋シ斯ノ如ク有形ノ状貌ト無形ノ心情ト相連絡スルハ啻ニ卑俗ナル感情ニ於キテノミ然ルニアラス、総シテ人類情動中ノ高貴神聖ナル者ニモ各々厳然動カスヘカラサル態度行為アリテ之ヲ表現セリ、特ニ中世ノ美術的観念ニ於キテハ無形霊魂ノ神聖ヲ示スニ毎モ其対影ヲ有形ノ身体ニ取レリ、例之ハ致命者、聖人、聖母、救世主ノ幸栄威厳ヲ示スニ其斬殺セラル、時ノ行為動作ヲ以テスルカ如シ、要スルニ吾人々類ノ感覚情動ハ独リ孤立シタル精神的ノモノニアラス而カモ各々肉體上ニ発表スルコトハ汎ク人類一般ノ証スル所トス

（『心身相関之理』第二章「心身ノ連合」）

正サニ身体的事実ト云フヘキモノハ単一一面ノ客観的事実ナルモ、心神的事実ニ至リテハ即チ二面（其一ハ感覚思想等所謂主観的連続ナリ）ヲ備フルカ故ニ、心身ノ両側ヨリシテ観察スルニアラスンハ、十分ニ心神ノ事実ヲ悉クスヲ得ス、彼ノ新聞ノ珍シキ、詩歌ノ雅ナル等、所謂心神的ノ刺戟モ亦其刺戟ニ応スヘキ身体機制アルニアラスンハ曾テ其働ヲナスコト能ハストス（同、第六章）

こうして、ベインらの心身合一の心理学は「無形ノ心情」をそれと一体のものとしてあり、またそうあらねばならぬ「有形ノ身体」によって表現しようとする修辞学に姿を変えて、テクストに無邪気な荒療治を施す。そこでは、作中人物たちの表情やしぐさをとらえようとする視線と執拗にその身体内部へ向かおうとする視線とがまったく同じ資格で共存している。「相貌の精神を代表する」（『新粧之佳人』第五回）ように、身体は密接に精神と結び付いている。「お米嬢の頬はパツト時ならぬ立田の紅葉、「女性の頬はあらゆる感情の徴候」、ハテ西洋人よく言ツた」（『お八重』第七回）。われわれの作者たちは顔つきを描写するように感覚器官や臓器やらを暴いてみせる。

心理学という科学によってその身分を保証された心臓をはじめとする身体のことばが、「西洋風の形容」といった美名の下に強引に文学のテクストに侵入しようとしたとき、いうまでもなくそこはかならずしも無人の野であったわけではない。

（血は脈管に浪を打ツて云々）七十八葉の心には「憐」の情「懐旧」を呼出し「懐旧」「恋」を催し云々）其他是等の言文一致的の形容は殊に際立ちて悪るし。心得へ可き事なり。　評者は何も西洋風の形容を使ふを難ずるにあらねど総体の文章が通人体なるに唐突にかゝる俗物体の形容を挟む時ンば目立ちて可笑し……よき衣きたる女子のおならとか云へる物をはしなく取落せしに異ならず（石橋思案「社幹紅葉山人著色懺悔盲評」『文庫』第二〇号、明二二・五）

かけ出しの言文一致家は無暗に妙な形容を使ひたがります、生命の無いものに手足を与へたり（則ち矢鱈と妙なPersonificationを使ふ）ヤレ心臓の土俵で考へが相撲を取ツた……抔と途方もないスベツタラフ、コロンダ流の形容を使ひたがりますが、併し段段改良して此筆のイヤミを除いたらどんなに敏捷で便利な物ができませう？　在来の文章は最早昼間の行燈……ドロンと消えて仕舞ませう（同「言文一致に附いて」『読売新聞』明二二・二・二一）

「在来の」いいかたでいえばいいのに、あえて気取った「言文一致的形容」を採用すると、文体をぶち壊したり、「イヤミ」なものにしてしまう。新しいことばが侵入しようとしたところには、れっきとした先住民がその存在を主張していたのである。科学が用いることばによって身体をテクストに持ち込むことは、ひょっとすると、「文彩（A Figure of Speech）とは、よりおおきな効果をあげるために、普通の平明ないいまわしから逸脱すること（deviation）である」（A. Bain, English Composition and Rhetoric, 4th. ed., 1877.）とする西洋修辞学の最初のページに書かれている定義を鵜呑みにして、擬人法をはじめ、読者の失笑を買う表現のア

クロバットを手当たり次第に競い合っていただけなのかもしれない。古典的な西洋の修辞学を連合心理学によって説明したベインの修辞学からは、心臓にまつわる文彩をみつけることができないが、それらがあえて規範から逸脱した、もってまわったいいまわしととられていたことはまず間違いない。

あえて心臓の鼓動などといわなくてもふつうは胸ということばでじゅうぶん用は足りたようにみえる。

相手ノ諸子ハ皆胸裏悸々タル如キ色アリ（川島忠之助『新説八十日間世界一周』第三回、明一〇、現代日本文学全集1）

危難切迫ナリ委細後ヨリト読下セハ聴キ居シ士女ハ胸中悸々トシテ孰レモ恐怖ノ顔色ヲナシ（『虚無党退治奇談』第三回）

胸はドキ〳〵頭はヂン〳〵。目はマジ〳〵。心はドギマギ耳はガン〳〵。（嵯峨の屋『浮世人情守銭奴之胆』第四回、明二〇・一）

胸は酷しくドキドキした。（美妙「ふくさづゝみ」第一回、『以良都女』第四号、明二〇・一〇）

妾の胸の楽屋では烈しく大鼓が鳴る（同第二回、同第五号、明二〇・一一）

震え乍らドキ〳〵する胸を鎮めて（『露子姫』第五回）

聞くよりお金は胸轟き掩ひかねたる紅の花散かゝる顔色は包むもならぬ洋服の手暖布を顔に押当て（『雛黄鸝』第四回）

「若しまた無礼を加へたらモウその時は破れかぶれ」ト思へば荐りに胸が浪だつ（二葉亭四迷『浮雲』第十回、明二一・二）

其声を聞くと均しく、文三起上りは起上ツたが、据ゑた胸も率となれば躍る。（同第十五回、『都の花』第一八号、明二二・七）

力造の胸は人知れず浪をうツて居ます（美妙「花ぐるま」第八輌、『都の花』第四号、明二一・一二）

覚悟はしても轟く胸（逍遙「細君」第四回、『国民之友』第三七号、明二二・一）

ちよこなんと独り待つ間も、胸さわぎする外は煙草ばかりが愛しまれ（緑雨「油地獄」七、『油地獄』）

貴客小歌さんを御存じと問懸けた一言に、おもはぬ珍事が貞之進の胸に波立たせた（「油地獄」十二）

さては縁結びに濱田と書いたはそれであつたかと胸は躍つて、それでは黒の羽織と云のはと思切つて尋ねると（同）

取次いで貴ふ間も胸わく〳〵。（同「犬蓼」、『油地獄』）

お貞胸先づ轟きて膝行寄り、お痛はしやお顔色もと紐らんとするを（同）

これこゝと車を下り、我知らずわなゝかるゝ胸鎮めて門を入らんと到り見れば（同）

手は顫ひ胸騒ぎ、飲めど喰へど味は知れざりき（紅葉『此ぬし』三、明二三・九）

聞くまゝに上気して胸はわく〳〵。（美妙『教師三昧』第五、明二三・一〇）

あるいは、胸の鼓動などとしてもよく、

黙然と表面は態と落着けど胸は熱湯と沸き返り堪へんとすれど生憎に動気烈しく轟きて五体も慄へるばかりなりき（『鍛鉄場の主人』明一九・九）

兎角する程に対面の機もはや迫りぬ此を思ひ彼を思へばいとゞ動気の胸に迫りてこころ弥々安からず、果は物悲しくなりて（関直彦『春鶯囀』第一編、明一七・三）

両人は胸中悸然として心安からず（『通俗八十日間世界一周』第二十九回）

胸の動悸はあわてゝ跳出す（「花の茨、茨の花」）

偖は臨終の時なる歟と悸々たる胸を押鎮めて静に枕元ににじり寄り

て見るに今や生死の境と見えたり余は此時動気は著るしく高まり胸には氷の張詰たる如く息も絶ゆる斗りにて我自ら死ぬかと覚えながら（『無味気』）

暫くして近づく足音。響につれて。胸の動気三つ四つ二つ……。（眉山人「黄菊白菊」第一、『我楽多文庫』第一四号、明二二・一）

君が有情の肘は妾が胸の皷動を計りし時（『お八重』第八回）

見る間に錦蔵の顔色は熱くなツて、胸の皷動は錦蔵の心を宇中天外に飛ばせてゐる（『露子姫』第七回）

其胸は動悸しつ其双眼は湿ひ来たれり（森田思軒『破茶碗』明二二）

急に胸の動気の烈しく成た、まるで馳つて来た様に。（巌谷漣「ア、夢」中、『新小説』第八巻、明二二・四）

紛らせど胸には動気の断えぬなるべし（宮崎三昧「追羽子」第六、『新小説』第一〇巻、明二二・五）

胸の動気は高し（篁村『雪達磨』第十五回、明二五・四）

想ひ見る此時姫の心中、胸を騒がす動気の洪浪！　腋の下に絞る熱き汗！（『露子姫』第六回）

想ひ見る此時お米嬢の胸の動気、もしも下手な医者をして診察せしめば、心臓病では――などと思ふ程もあらん歟、サア何を言ツてい、のやら、何をしてい、のやら、お米嬢は殆ど分らない、只此瞬間だけ坐をはづして、ホツト一息ついて、こたへ〳〵し汗を一度に拭ひ度い、胸の皷動を納めたい、さりとてあちらへ行きたいかと問へば、さうぢやない、何時迄も此坐敷坐ツてをりたい、ハテ妙なもの、乙女心の真味を知らぬ人、嘸や笑ひ玉はん。（『お八重』第六回）

余か胸の動悸は休む時なく呼吸さへも塞るへき心地せり（『浮城物語』第二十回）

余は吾が胸の搏動も亦た均しく止まらむと欲するを覚えぬ。（思軒「死刑前の六時間」二十一、『ユーゴー小品』明三一・六）

さらに、動悸だけで済ませる手もあった。

驚駭と恐怖にせはしき芳野の動気（紅葉『二人比丘尼色懺悔』怨言の巻、明二二・四）

お梅はまた更に動気がするを顔の色にも現さじと念じて堪へる苦しさ（篁村「藪椿」第十五回、『むら竹』第四巻、明二一・八）

那程驚いたか知れません未だ此通り動悸がして居ります（『唐松操』第六）

余は此報知を聞くや否や動悸、俄に高まり来て上頤下頤卅二根の歯ガチ〳〵と打合ひ始めたり（『浮城物語』第五十六回）

「あら儂のではお厭なの」、まぎれもない小歌の声で、其れを聞くと貞之進は一際激しい動気がして、居ずまひを改め片腕組んで、煙草を新しく吸つけて居た。（「油地獄」七）

初めの勢ひ酔て鬼挫ぐべかりしも耳熱うなるころ動気はげしく、みづから盛潰れて苦しさに堪かね頓て倒れて鼾高きに（「大蓼」）

総身の血は一時に顔へのぼりて。はげしき動気に息を内へ吸ひながら頭はぶる〳〵とふるへ（露伴「一刹那」一の上、『葉末集』明二三・六）

男は志保子の胸一撫で、／「大そうな動悸だね。」／「御よしなさいよ、往来で。」（『教師三昧』第五）

また、心臓の鼓動はいただけないが、かといって、胸ですますのはありきたりだというむきには、

余の臥牀のすこし上に、二個の鮮血したゝり流るゝ心臓を一条の箭もて貫きたるを、描きて、其の上に「生を欲す」と記したる者あり。（略）又た「余はマヂアスドンヴ井ンジヤツクを愛す」と題して、方さに燃えつゝある心を描きたる者あり。（「死刑前の六時間」十一）

のごとく、心臓を心とやわらげて、

彼の少娘が人形を愛するを見よ、固より之を大切にし、之を保護し

て余念なきなり、然れども、此れ未だ一点の敬意を存し得ざるの愛なるが故に、彼等は之に依て少さかも高尚に進むことなく、亦之に依て全心を鼓動するの愛を受けたることなし（巌本善治「理想の佳人（第五）。文明国民の理想、其一、美人必ずしも佳人に非ず。」、『女学雑誌』第一〇八号、明二一・五）

などとすることもできた。

氏ノ如キ外貌冷然タル皮膚ノ裏ニモ能ク人心ノ包蔵セラレテ悸然タルアリヤ（『新説八十日間世界一周』第十一回）

噫と許りに顔色変じ心轟くを知るやしらずや（服部誠一『世界進歩第二十世紀』第八回、明一九・六）

斯く大胆なるソヒヤさへも、将さに探偵吏の手帳を奪ひ取らんとせし時、その側に熟睡せし今一人の探偵吏が、夢幻の間に何事か分らぬ声を発しながら、俄然身動きしたるには、有繋に心胸驚悸せしかど、最早止むべき場合にあらず（夢柳『鬼啾啾』第十一回、明一七・一二～一八・四、明治文学全集5）

只今小掻巻とお枕を為持て上ますからね　とて湯浅の顔を覗くが如くうち見やり静かに起て彼方の居室に退きたるに此の為持てと言ひしを如何に聴誤りたるか湯浅は光子自ら持来る事よと信じたれば心中皷動して密かに其の後影を打目戍り莞爾として笑を面上に起し来り頸を縮めて（略）軈て忍びやかに歩み来る人ありと覚ゆれば湯浅の心は再び劇しく躍り動きて身中の情焔は焦すが如く（『満春露』第三十一回）

春行は自ら跳り狂ふ心の動悸を鎮るに由なく（「朧月夜」第十一回、『新小説』第六巻、明二二・三）

心頻りと皷動して立ては見たり、坐つては見（『春の夕くれ』第九葉、明二三・五）

一週間後の良人の口より告げられたる事なれば阿利の心の高き鼓動燃ゆるが如き顔の燄熱押ふる毎にいや高く拭ふ毎にいや熱く堪へぬ苦悩を楽しめるの外ぞなき（南翠「新編破魔弓」『国民小説』明二三・一〇）

むろん、やや古色を帯びているが、心の臓といってもいい(6)。

聞けばマルチニエ、ルに引れて次へ下る娘の声。あのお情深いお方までが。あゝ、何処までも不仕合せな私。不便なオリヰエ、。此声は胸の奥に通つて、心の臓を截る様だ。すると又心の極の奥に隠れて居た信仰が、オリヰエ、の為めに冤を鳴らした。（鷗外「玉を懐いて罪あり」、明二一・三・五～七・一一『読売新聞』、『鷗外全集』第一巻）

検屍の時に見ると、皆んな唯つた一つの突創が胸に在るばかり。解剖して見れば、心の臓が差し貫ぬかれてある。（同）

その気抜のした、そして譬へて云つて見ると、石や金でこしらへた彫像の目の様な目と、粗相な沢のない顔付を見たリツプは、心の臓が胸の中で顛倒つて、膝は緊がなくなりました。（同「新浦島」、『少年園』明二二・五～八）

若しいつか私どもが一同に、棄てられた一群が、昔の希臘の祭のとき狂女のやうになりましたら、あまたの鬼女になりましたら、そしてあの薄情をとこを摑へて、そのからだを引き裂いたり、その肉を掻き破つたり、その臓腑を探して、誰にも遣ると言うておいて、つひに誰にもやらなんだ心の臓をえぐり出しましたら、そのおもしろさは、まあ、どんなでござりませう。そのおもしろさは。（同「折薔薇」第四齣其七、『志からみ草紙』明二二・一〇～明二五・六、『鷗外全集』第一巻）

けっきょく、ことばづかいのきまりらしきものを想定するのも困難なほど、ことばは気ままに用いられている。その極端な例にいたっては、

用意ノ懐剣ニテ我レト我ガ心ヲ刺シ洞シタリ（『虚無党退治奇談』

第二十六回）

君が優しき心の鼓動を感じたりし時（『京人形』第一）

余が這個に対する怨悪極て深きにも拘らず渠の声を聞く毎に余の心の自ら鼓動するを免れざりき（思軒『懐旧』第三十八回、明二五・一二）

母親と顔を見合はせ、心臓裂けたりと思ふほどはッとして、上らむともせで框の前に佇めば（紅葉「むき玉子」十七、『二人女』明二五・二）

など、ムネ・ココロ・シンゾウというそれぞれのことばの差異をかろやかに無視しさえする。ことばは範列のうちにあることをさらけ出してはいるが、ではなぜ、そこからひとつを選ぶのかはあいまいなままである。表現のうちに科学の身体を露出させることは、たんに無作法なばかりでなく、表現の根拠をねこそぎにしてしまいかねないことによって、二重にスキャンダラスなのである。

ことばにそうした無法を許したのは、心臓・心の臓・心はいずれも人体の胸部にある同じ臓器を指すという見方、すなわち、ことばは客体である対象を指し示すとする指示対象説が身体の科学によって格段に補強された場の出現である。明けの明星も宵の明星もともに金星であるというわけだ。

名とは、まずもって「それについて話すことができるようにするために、あるものに取り付けられた標識（mark）」である。（A. Bain, Logic, pt. I, 1879.）

名詞ハ文章中ノ主本タル者ニシテ、（略）凡指シテ以名クベキ者、皆之ヲ名詞ト云フ（中根淑『日本文典』上巻「言語論」、明九・三版権免許）

ここからは、心臓ということばの使用はためにする無用の逸脱でしかないといういいがかりと、それに対し、胸の動悸といおうが心臓の鼓動といおうが同じじゃないかという反駁という、まったく正反対の言い分がそれぞれ平等に根拠を手に入れることができる。だから、心臓ということばの侵入を本気でくい止めたいのなら、無謀にも科学に無効を宣告するのでなければ、指示対象の問題をひとまず措いて、ことばの「外衍」ではなく「内包」を衝くしかない。

名辞ニハ大抵二重ノ意義ヲ具フ其広即外衍（ウヒツス・デーテーション）ト其深即内包（デプス・コンノーテーション）トノ二重ナリ

外衍ノ意義トハ唯其指ス所ノ物ヲ云ヒ内包ノ意義トハ其物ノ具ヘタル性質ヲ云フナリ

（菊池大麓『論理略説』巻上、第三編「名辞ニ二重ノ意義有ル事」、明一五・一二）

では、心臓の内包とはいったいどのようなものか。

心臓は血を運行するの器械にして胸の内にありて一身の主なり（馬場吉人『人體問答』明九・一一）

血液循環ニハ最モ大切ナル器（松山誠二『音引生理訳語集』明一三・七）

心臓と云へる器械に由りて血を総身に輸り出す（江馬春熙『訓解普通生理学』明一七・一）

耳が「音声ヲ聞クコトヲ主ドル器械」とされ（小林義則『小学人体部分問答』明九・九）、神経が「タマシイヲカヨハシイト」（鹿野至良『初学人身究理字引』明一三・一二）あるいは「運動及感覚ヲ司ドル道具」（『音引生理訳語集』）とされるように、心臓とは端的に「器械」であり、より正確には二つのシリンダーを持つポンプであった。

（問）血行器とは何々を云ひ且つ如何なる働きをなすものなるや

（答）心臓。動脈。静脈等を重なる血行器とし此者等は身躰中に血を持運ふものなり

（問）其構造の概略は如何

（答）其構造は固より復雑なれとも一般の理より之を云へば恰も噴水器の如き者二つありて一は其ゴム管より身躰中の悪血を持来りて之を他の噴水器に入れ他の噴水器は之を清浄にして又身躰中にまわす者なり今心臓より記さん」心臓は左右二ツの肉袋より出来左右の袋は又各上下の二房よりなる

（谷口吉太郎『通俗病理問答』明二一・八）

したがって、動悸とはポンプの運転に際しての音にすぎない。

彼の動悸とて胸にてドキ〳〵するは即ち心臓の左の下房の縮で血をはじき出す時胸にあたりて出る音にて脈とて手などにてヒク〳〵するは心臓よりはじき出さるゝ血の流れ来るなり（同）

なんともそっけない単純明解さではあるが、こうしたとらえ方をくつがえすのは、だからといってじつはそれほど容易ではない。

現今ニ於テハ心臓ニハ純然タル器械ノ運営ノミアルコトヲ記載スルニ至レリ此説モ亦古人ノ説（「心ハ精神ノ舎ル処」という考え方――引用者）ト同ジク妥当ナラズ何トナレハ是レ唯僅ニ此器ノ一斑ヲ弁明スルノミナリ蓋シ心臓ハ単一ナル器械ニ非ズ其動力ハ外ヨリ来ラズ人身体内ニ舎レリ其他心臓ハ自家ノ費損ヲ補復シ自家ノ運営ヲ滑利シ且ツ全身諸般ノ景況ニ応シテ其動力ヲ変換スルノ能アリ故ニ心臓ノ抽水機ト異ナルコト猶ホ胃ハ鍋釜ト殊ニシテ眼ハ眼鏡ト異ナルカ如シ（坪井為春・小林義直訳『弗氏生理書』巻之三、明一四・三）

これでは単純な道具ではないというだけであり、たいへんよくできた器械には違いないのである。精神の領域からいったん追い立てをくらった心臓の行く先はどうみても物質である器械の方でしかない。

心　心ハ神を蔵むるを主どる生の本。神の変なり

（河村貞山『単語国字解』初篇巻上、明六）

古人心臓ノ功用ニ就キ牽強付会ノ説ヲ建テ心ハ精神ノ舎ル処ニシテ勇気、寛大、慈悲、愛恋ノ如キ情意ノ発スル本源トセリ「コウラーヂ（威勢勇気ノ義）コルヂアリチ（誠実誠心ノ義）ノ二語ハ羅甸ノ心臓ヲ表スル語ノ「コル」ヨリ来リ其他心情心ノ感動等ノ語ハ既ニ古昔ヨリ唱ヘ来リシ所ニシテ今ニ至ルマデ吾邦ノ語ニ襲用スルヲ以テ之ヲ証スベシ

（『弗氏生理書』）

婦女の愛情は其性行の元素中の上位を占む、故に本書特に之を論述す。若し婦女の事を論ずるに当りて愛情の一个条を詳にせざらんには、例へば人体解剖論に於て心臓の用を略して記せざるが如し（渡辺修二郎訳『西洋女範』明二〇・一〇）

心臓ハ心念作用ノ主府ナリトノ説如何、

古人ハ心臓ヲ以テ愛情ノ主府ナリトシ、潔白善良ノ情並ニ邪悪ノ念モ、亦皆此中ニ存スルモノナリトセリ、此余習ハ今モ猶ホ通常ノ用語ニシテ、悪念ヲ去ルヲ善心ニ復スト云ヒ、其他悪心赤心ナド云ヘルガ如キハ、皆心念ノ作用ヲ心臓ニ帰シタルモノニ外ナラス、然レトモ是レ皆古来科学ノ未タ開ケサリシ頃ノ誤解ニシテ、今日ニ至リテハ心念作用ヲ以テ、全ク脳髄ノ働ニヨルモノトシ、復心臓ヲ以テ心念ノ主府トナスモノナシ

（『生理学問答』明三〇・五、再版）

人間とはつまるところ「物體」であり、

○人ハ地球上ニ於テハ如何ナル物體ナルヤ

□地球上動物中ノ霊長ニシテ直立歩行スルモノナリ

（上田文齋『校正小学人體問答』明八・一二、日本教科書大系近代編第22巻）

人トハ何ソヤ體格機関是レノミ體格機関ハ凡ソ心中ノ現象ノ由リテ出ル所ナリ

（中江兆民『理学鉤玄』第三巻第六章、明一九・六）

からだと云ふものは恰好道具機械の様なもので人間の拵へる物よりは宜しいが人間の拵へた道具でも器械が能く整ツて十分に好く出きて居る道具程損じ易いものはありません器械の能く出きて居ること此上もなき我からだの持方を不規則にすれば洵に損じ易いです（略）込入た器械とからだとは大抵同じことで夫れよりモツト十分に出きて居るものゆへ尚々能く使はないと損じ易いものだ（加藤弘之「からだの持方」『女学雑誌』第一〇一号、明二一・二）

せいぜいのところ、思考する物体である。

問　人ハ如何ナル物ナルヤ

答　人ハ地球上ノ動物ニシテ最霊敏ナル知識ヲ具ヘ直立歩行スルモノナリ

（中里亮『小学人體問答』明九・九版権免許、日本教科書大系）

思考を担うのはもちろん、かつて「頭ハ一身の尊。百骸の長」（『単語国字解』）とされていた頭の中に納められている脳である。

問　脳ハ如何ナルモノナルヤ

答　脳ハ神経ノ根本ニシテ霊魂ノ舎ル処ナリ

（『小学人體同答』）

頭は神霊を舎し人の主宰覚悟動作を主る所なり

（『人體問答』）

心臓は頭と入れ代わって「一身の主」になりさがった。しかもそれは、「ココロノママニナル肉」である「随意筋」（『音引生理訳語集』）より成るのではなく、たちの悪いことに人の意志を無視して勝手に振る舞うのである。

心臓は意識の直接指揮を受けさることは諸人の熟知する所なり

（小林義直訳『ハクスレー氏人身生理学』明二四・五）

心臓ノ運動ハ意志ノ力ヲ以テ之ヲ抑止シ得ベキカ、

曰ク否、吾人ハ意志ノ力ヲ以テ心臓ノ運動ヲ止ムルコト能ハザルナリ

（『生理学問答』）

心臓中ニハ別ニ神経節アリテ其運動ヲ主宰スルカ故ニ之ヲ體外ニ切リ出スト雖トモ（殊ニ蒸発ヲ妨ルトキハ）較々久シク其運動ヲ保続ス

（永松東海『生理学』下編、明一五・一〇第三版）

心臓とは、身体として人の重要な一部でありながら、その意志を無視しつつ規則的に動いている精巧な器械である。兆民のようにいさぎよく唯物論に与するのでなければ、心臓が主宰する器械である身体と折り合いをつけていくことは、ひどくむつかしいことであるにちがいない。ベインらの心身合一論が病は気からといったありきたりのものから区別されるのは、こうした困難な地点から発想されているからである。精神と物質とが共存することによってもたらされる居心地の悪さをかれはじゅうぶん承知していた。

只事ノ不可思議ナルハ一ノ有情物（人類又ハ動物）ニシテ物心両者ノ性質ヲ連帯スルコトノミ、即チ心神ノ妙力ヲ稟有セル者ハ坐ナカラ高等物質ノ稟賦ニ最富メル物体ナルヨリ、此ノ有情動物ハ宛モ二面二側ヲ帯ヒ、其一ヲ物体ト云ヒ、他ノ一ヲ心神ト云フ、ヘク且両者元来相裏反スル者ナルニ拘ラス、斯ノ一個物（即チ人或ハ動物）ニ付着シテ相離レサルコト誠ニ奇異ニ覚エタリ、然レトモ是亦実際上ニハ敢テ怪シムヘキモノニモアラサルヘシ、如何トナレハ若シ果シテ心神ナル者存スルニ於キテハ何レニカ帰着スル所ナカルヘカラス而シテ物体ヲ離レテ存スルコトモアリ得ヘシト雖トモ、幷ハ吾人ノ得テ推想シ能ハサル所ナレハ是非ナシ、左ニ右実際上ヨリ之ヲ観レハ心力ハ高等ノ生力有機性ヲ有スル特殊ノ物体ト共存スルモノニシテ、鉱物其他無生物トハ共存セサル者ナリトス（『心身相関之理』第六章）

生理学の進展にうながされて登場したベインらの心身論は、精神と身体との二項対立とセットにして身体の側に比重をかけた合一論を説く。いったんきっぱりとばらばらにしておいてから、再度統一しようとするわけだ。

心理学（サイコロジー）と一口に言ツても凡俗には分解らない之を解釈するにまづ自（イーゴー）と他（ノンイーゴー）との区別を言はなくては叶はぬ（美妙「嘲戒小説天狗」第一回、『我楽多文庫』第一三号）

四

二葉亭四迷の「めぐりあひ」につぎのような表現がみられる。

彼の男だ――と思ふと、何だか可笑しく心が（heart）むづついた。どうも見識てゐるやうに思はれた（「めぐりあひ」第一、『都の花』第三号、明二一・一一）

heartはheartの誤りだろう。この箇所、のちに

「あ、彼男だ」、と思ふと、何だかこそばゆいやうな気がした。彼男だと思つたも僻目ではあるまい（「奇遇」一、『かた恋』明二九・一一）

と改められるのだが、初訳でわざわざ「心（heart）」とされていることに注意したい。

いまheartを当時の英和辞典などにあたってみると、つぎのようになっている。

心、中心、心臓、胆力、内意（『附音図解英和字彙』第二版、明一九・七）

〔解〕心臓；心、中心、哀情、感情、胆力、勇気、性質、気力、能力、首要ノ部；心臓形ノ物（『ウェブスター氏新刊大辞書和訳字彙』明二一・九初版、引用は明二九・一二の第二九版。なお、〔解〕は解剖用語を示す。）

心、臺合、方寸、寸衷、衷懷、中心、シン、shin、ココロ、kokoro、シンノゾウ、shin no zo; covrage、胆、ダイタン、dai-tan、ユウキ、yu-ki、affection、愛情、アイジヤウ、ai-jo、ジヤウアイ、jo-ai（『英華和訳字典』明一一）

心。勢。中。心臓（『和訳英辞書』明二）

the seat of life in animal body／心。心胸。衷懐。肺肝。衷心。心臓。胆力。内意。（『英和双解字典』明一八・一二）

心。勢ヒ。中。心臓。／His heart beats. 彼ノ心ガ鼓動スル（『大正増補和訳英辞林』明一八・一二）

heartにすんなりと心という訳語が与えられるのなら、心にheartを付す意味はない。「心（heart）」といういいまわしは、心臓という臓器と精神としての心とをあわせて示そうとする苦心の作である(7)。「胸が荐（しき）りに躍りだした」「乱雑な考へに胸を騒がして」「胸がまた躍りだした」「随分烈敷（はげしく）胸が騒いだ」など、「めぐりあひ」で胸をしばしば用いており、また、

自分は婦人の傍に坐してゐた、その姿があれほど数次（たびく）妄想に見えた、あれほど酷（むご）く心を悩ましく又気を激（あら）した、その婦人の傍（そば）に。――婦人の傍に坐してゐた、そして心臓（しんぞう）を冷して無限の愁に沈んでゐた。（同第二、『都の花』第六号、明二一・一）

と、心臓ということばも承知していたことからしても、そうしたことがいえるはずである。

The breast as the seat of the affections, =heart, mind.（『和英語林集成』第三版、明一九・一〇）

むね（名）胸、心、膺、臆、こころのうち The breast; the bosom; the heart.（『漢英対照いろは辞典』明二一・五）

胸はたしかに精神の匂いがする。しかし、二元的に対立する精神と身体とをあわせ示すことはできない。心はいうまでもない。いっぽう、心臓

はこころと切り放されたまじりけのない身体そのものでありすぎる。

二葉亭のこうした苦心は、しかし、その後じゅうぶんに報われたとは思われない。ポンプにすぎなかった心臓が、ポンプのままで同時にこころでもありうるようになるのに、さして時間はかからなかった。みずからの身体感覚を生きるしかない主人公たちが出現し、ポンプを自己のうちに取り込むという荒療治を、かれらの生誕以前に犯された原罪のように背負うからである。たとえば『罪と罰』（内田魯庵訳、上篇明二五・一一、下篇明二六・二）のラスコーリニコフ。

幼いときに「眼球を厳しく笞たれる馬を見て、堪らなく情なくなツて、心臓の皷動激しく涙湧き立つ様」（上篇第五回、明治文学全集7による）に覚えてからというもの、かれの心臓はしばしば激しく鼓動してかれを苦しめる。あの「魔窟」のような下宿の部屋で母親からの手紙を読んだかれは「其不潔な枕に首を埋め、考慮に心を没し、心臓の皷動は激しくなツて、膳棚めきたる此小屋に顚転煩悶」（同第三回）するのだし、頭のなかで例の金貸しの老婆殺害という考えがしだいに成長して、ついに時計が行動開始の六時を告げたとき、

四辺は寂として階子からは一音も来らず、全家悉く睡眠の中に包まれた様であるにも関らず、心臓の皷動は激しく波立ツた。（上篇第六回）

一点に心を集め考慮を凝さんとしたが、心臓は高く動気して中々呼吸が急しくなツた。（同）

犯行を終えて下宿に戻り、うとうとと一夜を明かしたかれの耳に、警察からの呼び出しを告げにやってきた番人の声がドアごしに聞こえる。

『確に番人の声だ。何が用があツて来たンだ』ト耳欹てゝ起上ツた。心臓は遽に皷動を起した。

（上篇第八回）

魯庵の訳した『罪と罰』は、かれがもういちど老婆を殺す悪夢にうなされるところで終わっているのだが、夢から覚める寸前のかれを、

此処にも、彼処にも、何処にも――人は群がり、黙然として見物してゐた。心臓の動悸は高く、両足は重くなツて――渠は叫ばんとして終に眼が覚めた（下篇第二十回）

その心臓は他のだれのものでもないラスコーリニコフという個が生きる心臓であり、それがかれを心底脅かす。肺結核に冒された身体を持つお香（広津柳浪『残菊』明二二・一〇）とともに、ラスコーリニコフは精神と身体との分裂のなかでもがくことのできた最初の主人公のひとりであった。

「脳髄」も「覚性」もとんと旋風の如く段々旋転し初めて、兎角に判断が纏まらず、一種妙な感覚が這ひずり廻ツて、自分で自分を支配する力も失くなツたから、全く新らしい事を考へ出して、其新問題にかぢり付かうとした。が、到底是は出来なかツた。（上篇第八回）

『それから』の末尾を思い起こさせるくだりであるが、ラスコーリニコフの後裔の登場はかならずしも代助まで待たなければならなかったわけではない（8）。

噫何故か我身は今断頭台へ登るのが厭になつた。真実罪を白状するのが。厭になつた。嗚呼、実に若しも人殺しの罪が。此の世で償なへる事ならば。此の身を粉に齏いても償なひたい。叔母様斯の疲れた體軀をどうぞ。御救ひ下されまし。斯の體軀はどこまでも貫女方に救つて戴きたうございます。と無言の裡に謝言しながら。掌を合せて救命の恩人を伏し拝まんとしてハツト我に立返へり。おのれ悪魔め。気のゆるみに附込で何処まで斯の魂を瀆すかと。身を躍らせて刃物逆手に。づぶりと胸下三寸。斯所と思ふところへ。突刺して。アツと倒れる。踠きを静めて起き直ツた時の勝巳が言葉に

「あ、。御覧の通りの態になりました。斯の瀆れた心の臓を突破るだけの魂は私し持ツてをります。是れでもまだ私しは人間にな

れますまいか。斯の懐裡を探ツた上で。充分に御裁判を願ひます る」

と言い終ツたのが最後であツた。

（二十三階堂主人〔松原岩五郎〕「心臓破裂」団円、『国民新聞』明二五・一〇・二〇）

親戚の娘をふとしたことから手にかけてしまった若菜勝巳は、「魂」と「體軀」との葛藤を生き、こうして破滅した。あるいは、こちらはほんとうに心臓を破裂させた志村豊は、没落の運命にさらされた富農の家に生まれたときから「過度に心臓を労させ」る境遇を育つ。そんなかれのいっそうの「心臓鼓動の種」となったのは「他でも無い、其は此人の信じた主義である、貧民救助といふ主義である」。

大日本帝国の文明の中心といふ東京に来て見たが、第一に目に着いたのは貧富の非常に懸隔ある事だ。高い門の邸から追払はれる乞食共を見た時、紳士の車の後推をする立坊を見た時、志村豊君の心臓は幾回か破裂せんとしてあつた。「文明といふのは、貧乏人の汗膩を絞取つて、社会を光らすと云ふことで無からうか。」（小杉天外「卒都婆記」、『五調子』明二八・一二）

そこで「有名の政論家や有志家の門を叩いて、天下の急務は貧民救助であるといふ事を説廻つた」が、適当にあしらわれたことに業を煮やしたかれは、妻子をかかえての食うや食わずの生活にもかかわらず、自力で主義の実行にとりかかる。

一寸外に出る、乞食を見る、心臓が例の如く鼓動し始めて、最う何も彼も要らなくなつて来て、女房の寝ずに働いて溜めた仕立物の代を、ばら〳〵と投与へて了つた。

あるとき、例によって哀れな女乞食に恵んでやり、女房にあわせる顔がなくなって途方に暮れていたかれが、かつて助けた貧民の口からあの女は騙りであったと告げられたとき、物語は破局を迎える。「志村豊君の心臓は、上野の山下に在る居酒屋の店で破裂した(9)」。

心臓破裂

〔原因〕心臓筋変弱○心筋脂肪変質（最モ多シ）○心筋質炎○心弁膜狭窄○心筋中ノ新生物及胞虫○冠状動脈瘤○身体劇動○六十才以上ノ男子ニ多シ

〔症状〕全破裂ノ時（俄然卒死）○徐々ニ破裂スルトキハ（胸部劇痛、顔面蒼白、皮膚厥冷、冷汗、脈細微頻数、）○往々嘔吐及下痢（其症コレラノ如キコトアリ）

〔予后〕不良

〔療法〕（略）

（高橋真吉・岡本武次『実用内科全書』明二三・六）

明治のラスコーリニコフたちの心臓は、どうも簡単に破裂するようである。

注

(1) 『明治のことば辞典』が指摘するように、鼓動は「オダテアゲルコト」（萩田長三『増補布令字弁』明五）という意味から「動悸、動気（胸騒ぎのすること）、鼓動 Palpitation, beating (as of the heart).」（『漢英対照いろは辞典』、「どうき」の項）すなわち「鼓ガ響イテ動クヤウナ體ニ動ク（脈ナド）」（『日本大辞書』明二六）という意味へと移り変わっていくが、それには翻訳語の問題がかかわっているようである。

Palpitation, s. 鼓動スルコト（『英和対訳袖珍辞書』一八六二）

Palpitation, n. 鼓動、動悸（『附音図解英和字彙』）

生理学などでは、心跳・悸動・搏動などという。

大人ノ心跳ハ大約一分時間ニ七十二至トス（『初学人身窮理後編』巻上、明一三・一）

左胸ノ第五六肋骨間部乳線ノ稍〻内側ヲ按スレハ著シキ躍動ヲ覚ユ之

ヲ悸動ト云フ（永松東海『生理学』上篇、明一五・三第三版）
此胸壁ニ於テ触ルヘク且見ルヘキ跳動ヲ動悸心悸又ハ心動ト名ク（後藤新平訳『普通生理衛生学』明二一・四再版）
悸動　ムネノドウキ（『音引生理訳語集』）
心臓収縮スルトキハ（略）其尖端ハ胸壁ニ衝突ス是即チ心ノ搏動ナリ（林崇『生理小学』巻之二、明一五・一）

（2）逍遙がアディソンの「風流士が頭脳の解剖」と「風流女が心臓の解剖」という二つの小品を「心の解剖」と題して一括して訳出したのは明治三〇年一月の『新小説』（第二年第一巻）であった。後者は「媚婦」の心臓を実際に解剖するという趣向であり、当然、「心胞すなはち心臓の外被」や「胞、腔」など「解剖学の語」が出て来る。「共に遊惰淫逸なる当時の社会を諷刺せるものなれど、筆つきの高雅にして婉曲なるは此作者の特得にて、他人の企て及ばざる所なり。但し、アヂソンの滑稽は、我が一九三馬などのとはいたく趣を異にして、専ら含蓄を以て勝るものなれば、深く咀嚼せざれば旨味を暁りがたし」と逍遙が述べている「含蓄」のなかに、いまだに読者になじみのうすい解剖学の知識が含まれることはいうまでもないだろう。

（3）ちなみに、「洒落図解心の心」（『読売新聞』明二七・一・一）には、「いつそ身でも投げて見やうかなあ、そうすりやしんぞうの投身といふので、ひとは色事だとおもふだらう」という、心臓ということばがある程度定着していることを前提とした洒落がみえる（第五図）。

（4）つぎのような一文からも、文学の中に身体が持ち込まれた際に惹き起こされた拒絶反応をみることができる。

世に写真文学と名くるものあり其の一派の人は有りと有らゆる不潔汚穢なる事物を在りし儘に画き出し読者をして自ら其の悪を悪み其の邪を借りて正義の道に入らしめんと揚言す（略）一派の小説家及ひ新聞記者は善を勧め悪を懲すを名とし写真的文学の拡張を口実として現に此の罪を犯しつゝ在るに非すや英国に「アンテヴイヴイセクション」の会を結ぶものあり其の趣意は世人が科学の研究を名とし妄りに動物を生きながら解剖して惨酷無情を極むるを防止せんとするに在り独り無情なる生物学者のみ此悪弊に陥れるに非ず格段なる意趣も無く徒に厭世嘲罵の念を逞うして彼の寄席に果敢なき業を売る落語家一派の文学者亦之と同一なる非難を免れ得ざる可し余輩は此の徒を視ること恰かも妊婦の腹を割て其の医学を究めんと欲する似非人類に異なる所無かるべし。（土岐玄「写真文学」『日本評論』第一号、明二三・三）

（5）あるいは南翠自身の作品を指すのかもしれない。つぎの一節など、さながら心身相関の説明となっている。

我が力と憑む所の只一人の兄の無事に海外より帰朝したる悦びの為めに総て満身の機関に刺戟を与へて活潑に循環するに至りしかば皷膜の作用も其の以前の如くに恢復して忽ち聴神経の活動を起したるにてありし之れを約すれば驚動の為めに皷膜を密閉せられ悦動の為めに膜上の開通したるものなり（『満春露』第四十八回）

（6）「僂麻質斯の話」（森林太郎、『衛生新誌』第一一号、明二二・一二）に「正しい意味で「レウマチス」といふときは先づ指を急な節の煽衝に屈します――これは急に熱が出て節が痛み心の臓へまで影響を及ぼし、その熱の性も因も立派に定まつたものです」とあることからすると、佐藤享の指摘するように心の臓は口頭語であったようである。なお、鷗外は後々までも心の臓を用いた。

「アヱ、マリア」の鐘鳴るころ、われは近隣の子供と像の前に跪きて歌ひき。燈の光ゆらめくときは、聖母も、いろ〳〵の紐、珠、銀色したる心の臓などにて飾りたる耶蘇のをさな子も、共に動きて、我等が面を見て笑み給ふ如くなりき。（『即興詩人』「わが最初の境界」）
舞台では檻の狼のボルクマンが、自分にピアノを弾いて聞せてくれる小娘の、小さい心の臓をそつと開けて見て、ここにも早く失意の人の、苦痛の萌芽が籠もつてゐるのを見て、強ひて自分の抑鬱不平の心を慰めようとしてゐる。（『青年』九）

（7）heartではなくハートとする例もある。
ラックスモーアは彼夕べ心の疵を押さへてランプの下に倒れ座せり（徳冨蘆花「石美人」八、『第二国民小説』明二四・一〇）
「どうも自れツたいこと少しは妾のハート（心根）を察して下すツてもよさソうなものサねヱ「其ハートが此スペードの様に真ツ黒だから仕方が無い「アレ憎らしい又一枚取ツてサこんなにハートの様に赤い妾

の心を貴郎は知らない（思案外史「女生徒かたぎ煩悩の闇」第二回、『我楽多文庫』第一三号、明二〇・七）

蘆花の例でも、「押さへて」とあることからして、「ハアート」ということばは臓器を喚起するために付されたとみなされる。

（8）その他にも、つぎのような作品を参照。

心臓は激しく皷動して、宛然早鐘を撞くやうである。（紅葉『隣の女』五、明二七・六）

譲の心臓は実に破裂した。くら〳〵と眼が眩むで、一時は全く知覚を失つたが、その中でも管は見事に吹澄ましてゐた。（同七）

直に我に復ると同時に、心臓が躍るやうに皷動しはじめる。（同十六）

水をやゝ浴びたらむやうに、清澄は満身一時に冷却して、血は心臓を破りて迸りたるかと覚えぬ。（泉鏡花「予備兵」六、『なにかし』明二八・四）

世の中に、ほんたうに頼みになるは自分ひとりより、外にはない、と苦しさうな息づかひ、気違いになツたやうに、襯衣の釦鈕を、べリ〳〵と両手に断り、皷動烈しき胸をあらはし、ジツト、心臓のあたりを抑へ『世は薄情の塊だ、ト思はず一句呟いて（後藤宙外「ありのすさび」二、『文芸倶楽部』明二九・一）

（9）これに対し、心が破裂しても死ぬわけではない。

私は愛する事最も深い、全世界をも愛する気です、然し是が為めに悪名を受ました。私の心は破ぶれました。悪魔は私の心へ刃を植付ました、私の心へは蛇が生じて、朝から晩までのた打まはり、容赦なく私を苦しめました。（略）私の心は破裂して居ます、私は冷淡の人となツて居ります、如何しても愛する事は出来ません、愛するには情が足りません、嗚呼如何して此様に心が破ぶれたのでせう？　私は天に絶叫しました、愛を戻してくれ、戻して幸を与へてくれと絶叫しました。然し無益でした、私の心は空、空、空、あるものは唯懊悩計り。嗚呼姫よ、懊悩が私の心の石です。（嵯峨の屋「夢現境」『第二国民小説』）

付記

『以良都女』（不二出版）・『我楽多文庫』・『文庫』（『硯友社系雑誌集成』ゆまに書房）・『女学雑誌』（臨川書店）・『東雲新聞』（部落解放研究所）の引用にはそれぞれの復刻本を用いた。

引用に際しては、ルビを適宜省略し、変体仮名および合字はすべて現行の表記に改めた。また、書名の角書もタイトルに組み込んだ。

（一九八九年十月五日受理）
（一九八九年十二月二十七日発行）